米花町の中心で ■ を叫ぶ

たけのこ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

強盗、殺人　、爆弾の三拍子揃う犯罪都市・米花にるーみっくわーるど的なノリをもった中華娘がいたら、ギャグ漫画補正でワンチャンあるんじゃ……？

っていう思いつき。

主人公の勘違いに振り回されるドタバタ話。

目次

プロローグ　1
1　5
2　10
3　15
4　19

プロローグ

中国の人里離れた山の奥地。ある閉鎖的な部族が住んでいる。

その名は【女傑族】

女性を中心とする戦闘部族で、その伝説は今もなお語り継がれている。歴史書の片隅に名を残し、女傑族を敵にまわせば二度と太陽の光を見ることはできないと恐れられている。

外部からの干渉を一切うけず、闘いに明け暮れる女尊社会残っている武闘派集団。

その村にある一人の少女がいた。

少女の名前は【ポプリ】

セミロングの髪をサイドで三つ編みにし、ぼんぼりで纏めて団子状にしている。

息を切らしながら、ポプリは長い杖でついてくるオババからの攻撃をかわす。

「ポプリ……　おまえはあの女子(おなご)を殺さずに帰ったそうじゃな。女傑族　三千年の掟

破りじゃ」

ポプリは日本で出会った同い年ほどの子供に【死の接吻】を授けていた。

一対多数で一方的にやられていた子供を助けて、「大丈夫アルカ？」と声をかければ、逆ギレされ、油断した隙に子どもの渾身の頭突きがポプリにクリティカルヒットした。

目が覚めれば、その子どもに介抱されていたが、ポプリはこの目の前の子どもに倒されたのだ。

子どもとはいえ、掟は掟。

ポプリは自身の保身と村から旅立つ口実のため、迷わず掟に従った。

【死の接吻】である。

女傑族には【他所者に敗れた場合、相手が女ならその相手に死の接吻を与え、殺さなければならず、相手が男なら夫としなければならない】という掟がある。

キョトンと目を白黒させ、アワアワした様子の子どもにポプリは満足気に口角をあげ、宣戦布告した。

そして、オババに報告するやいなや、鬼の修行の幕開けだった。

「あいやぁ！オババ、私、日本でソイツみつけだす！これ絶対的運命（さだめ）ネ！」

ようやくオババの日本への切符に許可がおり、ポプリは日本の地に降り立った。

「会いたかたヨ。日本！とシャバの空気が美味しいネ」

満面の笑みを浮かべ、はしゃぎ回ってる。

「……　やべ。形だけでも掟、まもんなきゃアル。オババにバレたらマズいアルからな……」

ちょっと日本語が変わってるのは愛嬌だ。ハッと顔を青ざめ、オババによる修行でできたトラウマが頭に浮かぶ。

「覚悟するヨロシ！【フルヤ　レイ】」

ビシッと指をつきだすが、指のさきには誰もいない。しぃん……と静まり帰って、枯れ葉をのせた風がひゅうと舞う。

「日本には、すたばぁがあるらしいネ。……　観光がさきアルな!!」

カッコつけたことを流して、切り替える。目的がすでに変わってる。実力は折り紙付きだが、このマイペースで楽天的な思考はオババも匙を投げたしたほどである。

1

アルアル口調で喋ってるけど、これは最早長年の癖だから抜けない。心のうちはわりとペラペラ日本語が流れてます。

こちとら来日7年だぞ？いい加減覚えるわ。テレビ、雑誌、お友だちとの会話……日常でじゃぶじゃぶ日本語が飛び交ってたんだ。そりゃ覚える。

でも、ほら、イメージあるじゃん？

何故か多くの日本人は中華服を身に纏った私（友人は《チャイナ娘》と呼んでいた）を、【アルアル】と喋ると思い込んでいるのだ。片言の日本語で喋ると、買い物でオマケくれたり、「私、日本語わからないアル」と誤魔化せたり、いろいろ得してるので、そのままにしている。

それに夢を壊さないって大事だよね？

私が今、こうして日本にいる理由は村の掟【死の接吻】があるからだ。

まだ幼かった私が家族旅行で日本に訪れたさい、ある子どもと出会った。
フラフラと迷子になってた私は通りかかった公園で小休止しようとしていた。

「変な髪の色ー！」
「変なのー！」

複数の少年に囲まれた金髪で日に焼けた肌をした女の子が苛められていたのだ。
正義感が刺激されたのか、女尊男卑社会で育ったせいか、私は迷わず、その女の子の助太刀に出向いた。
苛めっ子は大したことなかった。

「大丈夫アルカ？」

パッと振り替えって、女の子の顔を見ると、蒼い瞳に涙をため、フルフルと唇を引き結んでいた。

「余計なことするなっ！」

――――ゴォンッ

女の子の頭が私にダイレクトに直撃し、バサリと倒れたのである。

そして、目が覚めれば、私を負かした女の子がいた。眉を寄せて、小さく謝られたが、それどころじゃない。

女傑族には絶対に破ってはならない掟がある。

隠し事は苦手だし、口を割らされる。同い年の女の子に負けたということを。

私がするべきことはひとつ。

「私　ポプリ。お前　名前　教えるヨロシ」

「……　ふるや　れい」

彼女は居心地悪そうに答える。

私はサッと距離をつめ、彼女に【死の接吻】を授けた。

目の前の彼女は目を大きく見開いて、目を白黒させている。日に焼けた肌の顔を真っ赤に染めて「……　え…　え……」や「……　あ……」と顔を手で覆い、とても混乱しているとみてとれる。

「お前殺す。これ絶対的制約ネ。それまで精々強くなるヨロシ。
くたばるなヨ、フルヤ　レイ」

狼狽えた彼女に、キリッと瞳をあわせ、宣戦布告した。満足感と新たな敵の出現に気分が高揚し、私は中国へ帰国した。

そのときのことを、オババに報告すれば、鬼畜すぎる修行が始まった。

ちょうど閉鎖的なこの村から出ていきたいと思ってたし、私の【死の接吻】の相手は日本にいる。

自分が強いという自負心があった私には屈辱だったけれど、旅立つ口実ができたのはラッキーだった。

2

日本に来たばかりの話。
観光巡りから帰ってきた私は、マンションの一室で落とし物を拾った。
帰り際、ザワザワと騒がしく、お隣さんや上の階の人たちが慌ただしくマンションのエントランスへ駆け込んで外に出てた。
……　はて。今日は何かイベントがあっただろうか？
首を傾けるが、思い当たる節はないし、そもそも誘われてもいない。ので、私の優先は今しがた、拾ったばかりの落とし物だ。

いつもより静かなマンションを降りると、妙な団体さんとすれ違った。

「爆弾が仕掛けられてるのはこのフロアか？」
「それらしきものは見当たらないな……」
「イタズラの通報だったのか？」
「……　いや。犯人の要求はきてたぞ」

団体さんは重厚そうな服装をきていて、ガチモンの人にみえる。この前、放送してた刑事ドラマに出てた爆弾の解体屋そっくりの恰好だ。何かの撮影かと思い、会釈をするに留めてスルーした。

最後尾にいた軽装の男とバチりと目が合う。

ははーん。わかったぞ。この男はあの団体さんのマネージャーかディレクターだな。さっきの団体さんはエキストラか役者さんってところか。

今から撮影が始まるから、マンションの住民は出ていったのか。知らなかった。回覧板に書いていたのかな。読み飛ばしたり、ちゃんと理解してなかったりしてたのかもしれない……　日本語むずかしい。

「あのー、ここに何か不審な物ありませんでしたか?」

ヘラりと笑い、サラサラした肩まで伸びてる髪をした男が私に話しかけてきた。

……　もう撮影が始まってるのか?

「不審な物　知らないアル」

「そっ――」

「私　落とし物　拾ったネ」

「――か……　えエェッ!?」

ほれ、と紙袋を掲げる。男はぎょっと表情をかえた。

「それ、ちょおっと詳しく見せてくれない?」

男が手を伸ばしてきたので、サッと距離を取る。

「私　これ　交番に　届けるアル。お前に　渡せないネ」

「いやいや、俺がそのお巡りさんだからね?ほら、安心して渡してくれないか?」

「ハッ。そんなウソ、この私に通じると思たカ?そんなんじゃ　レッドカーベットは夢のまた夢。お前、この業界向いてないアルヨ」

「うッ!し、辛らつだな……」

団体さんと男を見比べながら、鼻で嗤った。すると、《ピ……　ピ……　ピ……》と紙袋の中から音が聴こえる。

「それ爆弾じゃ!?……　いいから早くそれをこっちに寄越せ」

サァと青ざめた表情をした男は迫真に迫っていてなかなかリアリティがあった。

「オババが言ってたネ。【落とし物は交番に届けるべし】これ日本の常識アル」

「そうだけど！そうじゃない！ちょっと待ってチャイナちゃん!!」

来日する前にオババから日本の常識を私に教鞭を執った。日本は細かいルールやモラル、道徳心に厳しい国だそうで、中国の田舎から出てきたわけだし、恥を晒しかねないように頭に叩き込まれたのだ。

「用がないなら私の目の前からさっさと消えるネェェェェ！」

「ぁべしッ!!」

女傑族流のアッパーを食らわせてやった。まったくしつこい男だった。男は宙を舞い、ドサリとアスファルトに落ちた。「萩原アァァ!!」って後ろで騒いでたけれど、今はこの落とし物が先だ。その男の介抱は任せたぜ、モジャモジャ男。

無事に交番に届けると、お巡りさんは腰を抜かしていた。何故か私のすぐあとにやって来たさっきの団体さんがお巡りさんから紙袋を引っ手繰った。

……　あいやぁ！それは撮影の小道具だったのか。持ち主が見つかってよかった。

良いことをするってすばらしいアルナ！

3

猫飯店の出張出前サービスの帰りみち、私はまた落とし物を拾った。

米花中央病院のロビーでだ。

病院の連中はほとんど毎日　出前を頼むので、　太客なのだ。

落とし物はまさに　拾ってください、見つけてください　と言わんばかりにぽつーんと置かれていた。病院の受付に「落ちてたアルヨー」と声をかけると、受付のオバチャンは慌てた様子でコールした。

暇をもてあまして、ぼんやり落とし物をみていると、いつぞやのサラストチャラ男がやって来た。向こうは驚いた顔をして、拾ったときの状況を尋ねられた。

「日本　ロボの犬　ペットにするアル。驚異的飼い主……　ニュース見たとき　世界中が　度肝抜かれたアル。」

「ものすごく誤解されてる!!?」

世界的企業のS?ＮＹが開発した犬型ロボットは世界中に衝撃を与えた。当時の様

子を閉鎖的で辺境の地にあった私の村にやって来た商人が神妙そうな顔で語った。
曰く、「日本人はロボットの犬をペットにしてるんだ。きっと働きすぎて脳ミソがイカれちまったんだ……」
それを聞いて、【カロウシ】の恐ろしさを知った。来日してみれば、猫型ロボットを飼う小学五年生の男児児童のアニメが国民的アニメとして放送されてたし、電車に乗るときは切符なしでカードをかざして改札を通ってる。
日本は機械が日常に溢れていると身をもって体験した。

「公園の子供　た?ごっち　肌身はなさず　持てたアル。機械を　ペットにする、これ　噂の　メイド　イン　ジャパン　の新商品ヨ」
「んなわけねーだろ!!?そんな国産品を大量生産されてたまるか!!」
「あいやぁ!《ピ、ピ、ピ》って　鳴いてるアルヨ。犬の次は鳥カ?私も　これ　ペットに　するネ!」
「お願いだから　話聞いて　チャイナちゃん!!?」

正直、育成まで視野に入れた卵型のあれは、羨ましい。子どもに話を聞けば、「毎日宿題ばっかりで大変なの!」と愚痴られた。

なんと、おそろしや……　日本人はこの歳から勤勉精神が芽生えてるらしい。彼らの癒しがペットだと察した。

「もしもし、じんぺーちゃん？……　は？観覧車にいる？……　こっちは爆弾見つけて……　米花中央病院にあったらしいんだけど」

ギャイギャイ騒いでた男は携帯を持ち、誰かと通話し始めた。男の目が離した隙に落とし物に触れた。

――――バキィイッ

……　あ。

やべ、しくった。力加減を間違えた。いけない、いけない。つい、修行の名残り

が……

男はぽかーんと間抜けな顔で口をあんぐり開いている。耳に押し当てた携帯がカランと床に落ちた。

『おい、何だいまの音。どうした萩原？……　チッ……　返事しろ！……　萩原!?　萩原ァァア!!』

粉砕された落とし物をお互い顔をギギギと見あわせ、

「……　私　弁償　できないネ。お金　ない。」

謝罪した。

男は、ハァ～～～と海よりも深いため息を溢して、へにゃりと腰を床に落とした。

4

猫飯店の常連客から映画のチケットをもらい、無料で観れるなら行ってみようと、一人映画館に乗り込んだ。ポリポリとポップコーン片手にじっと大きなスクリーンを見上げる。お馴染みの映画泥棒のＣＭのあと、やっと上演が始まる。

【迫りくるウィルスの脅威に、彼は一人で立ち向かう……

Ｎｏ　ｗａｒ

Ｌｏｖｅ　ａｎｄ　Ｐｅａｃｅ

Ｈａ　Ｈｉ　Ｈｕ　Ｈｅ　Ｈｏ

Ｌｅｔ，ｓ　Ｇｏ！　Ａｎｐａｎ―ＭＡＮ】

――その日、私は　胸につっかえていたひとつの《謎》を見破った。

＊＊＊

映画を見終わったあと、私はすぐさまパン屋へ走った。私がずっと疑問に思っていたあるパン種……　中身はあんこだったり、チョコだったり、クリームだったり、店舗差はあるが、何故かどこのパン屋でも置いてある。

これがメロンパン、カレーパン、食パンとなれば世間一般に定番商品として認知されているが、私が《謎》に思っていたそれは、キャラクターパンとしてある一定層の支持を得て、そこそこの人気を得ていた。

にこちゃんマークのそのパンは、どこのパン屋にも売られている。９割の確率でお目にかかるのだ。

店員に「このパンのモデルは何アルカ？」と聞いても、「そちらのパンはキャラクターパンでございます」といつもはぐらかされるのだ。府に落ちない心境だが、今日の映画をみて納得した。

きっと無許可で販売していたんだ、と。

暗黙の了解とやらかわからないが、あのヒーローもひと口サイズで皆に分け与えていたし、お客さんもとくに気にした様子はなかったし、これ以上言及するのも　やぶ蛇だ。そっと心のなかに閉まって、店員にはこれ以上何も聞くまい。これが日本人がよくいう【空気を読む】ってことだ。

私は何も知らなかった。以上、おーけー？

キャラクターパンのモデルは愛と勇気だけが友だちのヒーローだ。

あのヒーローは自らの身を差しだし、とんだ馬鹿力でＵＦＯに乗ったウイルスを空の彼方へぶっ飛ばしていた。

女傑族的にみれば、あの強さは羨ましい。しかし、殺そうとなればファーザー・ジャムとアタックＮｏ．１のバター女子がいる限り幾度となく復活するだろう。犬のアシストもなかなかだった。

すっかり感化された私は　にこちゃんマークのパンを買い占め、夜の町でテーマ曲を口ずさみながら散歩していた。

歌詞の深さに全私が泣いた。

何回もループして唄っていたから、端からみたら不審者だった。言い訳をするなら、俗に言う深夜テンションが舞い降りていたのだ。

そして、フラフラと彷徨う歩いていたらぱちりと目があった。

もう一度言う。

深夜の廃ビルの屋上で顎髭と長髪男のカップルのド修羅場をもぐもぐあんぱんを食していた私は目撃してしまった。

「あいやぁ!お楽しみ中だったアルカ?」

即座に否定の言葉が返ってきて、「何故ここにいる?」「組織の追手か?」と今度は二人揃って詰問してきた。さっきまで剣呑な雰囲気なのにここぞとばかり二人揃って睨

んでくる。なんとかは馬に蹴られるとはこのことアルナ。

喧しかったので、問答無用とばかりにそのお口を強制的にふさいだ。

アタックＮｏ．１バター女子みたく、手持ちのにこちゃんぱんを「新しい顔ヨ！」の掛け声つきで、ジャストシュートした。

顎髭の男は目論見通り、お口へシュートが決まった。顎髭は口をモゴモゴさせていて、間抜けな面になっている。

エンジンがかかった私は調子に乗ってホイホイと袋から複数のパンを両手にとり、「ホワチャー!!」と次の的へ切り替えた。

次の的の男は顎髭の男をチラリとみて私の次の行動がわかったのだろう。長髪野郎は生意気にも口を閉じていた。ぐしゃりとパンがへこむ。それをみた長髪野郎は鼻で嗤い、私を攻撃しようと体勢をかえてきた。

サッと頭に浮かぶのは映画のワンシーン。

映画でみたバター女子パイセンはあんこの顔を古いあんこの顔がぶっ飛ぶ勢いで投げつけていた。見た目は非力な女の子に見えるのにアタッカーが半端ないバター女子パイセン。そこにしびれる、あこがれる。

イメージは、あの復活シーンだ。

勢いよく、両腕を振りかぶって……

「新しい顔じゃあァァァァ!!」

長髪野郎の顔面に投げつけた。

その結果。

あんぱんは私のアタックに耐えきれず、原形を留めきれず、長髪の男の顔面は中身の

クリームがぶちまけられ、べっとべとになった。

「これで　元気１００倍アルヨ。感謝するヨロシ」

にこちゃんパンをゴクンと食した顎髭の男は、目に涙を浮かべながら、ブハッと笑った。

この場にいても面倒だし、さっさとトンズラするにかぎる。私はまだ日本でやるべきことがあるのだ。ご厄介はノーセンキュー。

ヒーロー・あんこは年齢、性別、国籍を超えた正義の味方だってことだ。

翌日、店で修行がてら中華まんでバター女子パイセンのように素振りをしていたら、店主から拳骨を落とされた。食べ物を粗末にしてしまったことは反省している。